

謝六逸『日本文學史』をめぐって

小田切文洋

On Xie Liuyi's *A History of Japanese Literature*

Fumihito OTAGIRI

内容提要：

一九二九年北新书局出版的谢六逸编写的《日本文学史》是作为现代中国的早期，内容很系统的日本文学研究受到很高的评价的著作。谢六逸有三种关于日本文学史的著作，就是一九二八年开明书店出版的《日本文学》、一九二九年商务印书馆出版的《日本文学》以及北新书局出版的《日本文学史》。这三种书的内容均有各自的特色，也有相辅成的关系。本论文对这三种著作进行分析，探讨谢六逸对日本文学的很高的见解和超过一般的洞察力。

謝六逸『日本文學史』（1929年）は、中国での最初の体系的な日本文学研究書として言及されることが多いが、その内容については十分に検討されているとは必ずしもいえないので、ここで詳しく考察してみたい。

著者の謝六逸の生涯と事跡については、陳江、陳庚初編《謝六逸文集》商務印書館、1995年5月（以下、文集と略記する）の附録に収められた茅盾や鄭振鐸ら友人・子弟の回想文、秋陽著《謝六逸評傳》貴州民族出版社、1997年5月¹⁾、陳江、陳達文編著《謝六逸年譜》商務印書館、2009年8月が基礎資料になる。

謝六逸は、1898年、貴州省の省都貴陽に生まれた。生家は読書人の家系である。1918年、謝六逸19歳の時に日本に留学し、予備校で1年日本語を学んだ後、1922年に早稲田大学政治経済学科を卒業して帰国している。日本の年号でいえば、大正7年から大正11年にかけてである。1902年（明治35年）に日本に留学した魯迅を第一世代と考えれば、留学第二世代の文学者ということになる。「私的信条是多读，深思，慎作。（数多く読み、深く考えて、慎重に書く）」と自ら書いている生涯のモットーは、留学中にも貫かれたようである（《读书的经验》，載《文集》）。謝六逸が、『日本文學史』を執筆していた時、3、40種類の

文学史関連の書籍が机やテーブルに積まれていたという証言がある²⁾。謝六逸は前引の文章中で「我的记忆力还好，无论书籍或论文，看过一遍之后，留在脑里的印象总有半年以上不会消失。作品里的警句我更能记忆的长久些。」とも言っている。多読家で人並みはずれた記憶力という生来の資質が生涯を通しての多岐にわたる数多くの文章を生み出すことになる。

帰国後の1928年7月に、当時中国に紹介され始めていた神話学関連の著書として上海世界書局から『神話學ABC』を刊行している³⁾。神話学の意義、最近の神話学説、神話学と民俗学の関係、神話の起源、神話学の方法論を説いた前半の各章は、序にも言うとおりの、刊行間もない西村眞次『神話學概論』（早稲田大學出版部、1927年11月）を踏まえた内容になっている。後半の諸地域の神話の比較研究を論じた章は、高木敏雄『比較神話學』（博文館、1904年10月）を参考にしている。「自然神話」では、『古事記』の天照大御神や素戔鳴尊の物語が、「英雄神話」では大国主命の物語がそれぞれ取り上げられている。神話の基礎理論の著作として中国で早い時期の出版物であるが⁴⁾、日本の神話学の成果を吸収してまとめられたものである。

帰国後間もない1926年には、『兒童文學』を創

刊し編集に携わっている。自らも童話や児童劇を発表して、児童文学の発展に力を尽くしている。留学中の1922年に『小説月報』（文学研究会の機関紙）に連載を始めた「西洋小説發達史」などヨーロッパ文学関連の文章も多い。

1926年に、復旦大学に新聞系が開設されると、主任を務めるとともに、新聞学関連の文章を数多く執筆して中国における新聞学の発展にも大きな寄与をしている（『日本的杂志』、『日本的新闻事业』、載『文集』など、日本の雑誌や新聞を取り上げた文章もある）。1944年、四十代の半ばで亡くなるという短い生涯にもかかわらず、謝六逸はこのように多方面の仕事を残した人である。新聞学、児童文学とならんで謝六逸がなかでも打ち込んだのは、日本文学の翻訳と研究である（前述の『評伝』に『謝六逸著译年表』が付されている）。

日本文学の研究では、1929年8月に上海開明書店から出版された『日本文學』（前々年刊行の初版を増補したもの）、1929年7月と9月に上海北新書局から上下二巻で出版された『日本文學史』、1929年10月上海商務印書館から出版された『日本文學』の三種の著作が中心になる。翻訳の方では、『日本近代小品文選』上海大江書舗、1929年5月と『志賀直哉集』上海中華書局、1935年3月を代表的なものとして挙げることができる。『日本近代小品文選』には、佐藤春夫「病める薔薇」、夏目漱石「猫の墓」「火鉢」⁵⁾、芥川龍之介「女体」「尾生の信」「英雄の器」「黄梁夢」「侏儒の言葉」⁶⁾、志賀直哉「雪の日」⁷⁾など9作家の15作品を収めている。「荒絹」「范の犯罪」「或る男と其姉の死（訳名は《一个人》）」「母の死と新しい母」「焚火」「雪の日」の6作品を収めた『志賀直哉集』の翻訳とあわせると、大正文学の重要な成果を中心に翻訳紹介していることが分かる。『志賀直哉集』には、巻頭に菊池寛「志賀直哉氏の作品—敬愛の意を表すために—」（『文章世界』大正7年11月）と宮島新三郎「志賀氏の藝術」（『中央文學』大正9年6月）の二評論の翻訳も収めていて志賀文学の紹介として意を尽くしている。このような単行本にまとめられたものの他にも、日本文学関連の文章を多く残している。

謝六逸は、郁達夫や田漢のように日本の文学者

との密接で深く影響を受けるような関係はなかったようだが、触れておきたいのは谷崎潤一郎との交流である。谷崎は、1926年1月、二回目の中国旅行をしている。二回目は、初回のように江南各地の観光地を中心とした旅行ではなく、上海での一か月あまりの滞在となった。魯迅との親交で知られている内山完造の計らいで、郭沫若、田漢、謝六逸、歐陽予倩ら日本留学経験のある文学者や演劇人との交流が実現している。その交流の思い出を記したのが「上海交遊記」である（この年の『女性』誌上に三回にわたって連載された。以下、引用は『谷崎潤一郎全集』による）。この文章の中で、謝六逸の第一印象を記した一節を、以下長めであるが引用する。谷崎は謝六逸に会う前に、内山から「新進文士の代表的な人物」の一人として、また「日本の古典を研究している」ことを聞かされている。

私たちは直ぐと二階の会場へ案内された。謝六逸君が續いてやつて來た。うすい、間服のやうな色合ひの背廣服を着て、上衣の下に毛糸のスエーターを見せてゐる。頬の豊かな、おつとりと太つた鷹揚な紳士である。内山氏は郭君を謝君に紹介する。黨派を異にする二頭目は、此の機會に初對面の挨拶を交す。それから極めて流暢な日本語の會話が始まつた。謝君の曰く、「僕はあなたの弟さんを知つてゐます。僕は早稻田であの方に教はりました。精二さんは僕の先生です」と。そして出された名刺を見ると、裏に、MR. LOUIS L.Y.HSIEH M.A.(DEAN OF SHEN CHOW GIRLS 'HIGHSCHOOL, PROFESSOR OF SHANGHAI UNIVERSITY)とある。即ち謝君は文藝に従事する傍、上海大學の教授を務め、シエン・チヨウ高等女學校の學長を兼ねてゐるのである。その名刺を見、落ち着いたある物腰や態度を見、少し髪の毛の薄いのを見ると、相當の年頃に思へるけれども、精二に教はつたと云ふのだから、まだ若いのに違ひなからう。それにしても精二は彼の教へ子の一人が、今上海で斯くの如き地位にあることを知れりや否や。

谷崎精二は、兄潤一郎より四歳年下で早稲田大学で英文学を講じていた。文学研究会に属していた謝六逸と創造社の中心人物である郭沫若との関係については、内山完造から事前に聞いていたのであろう。「シエン・チヨウ高等女学校の学長」とあるが、1923年、上海神州女学校の教務長に赴任している。当時まだ27歳であったが、大人風の落ち着いた物腰を身に着けていた謝六逸の風貌が好く伝わる文章である。

前述の三種の著作を中心に謝六逸の日本文学研究について検討に入りたい。前引の《謝六逸評傳》は、謝六逸自身の文章を引きながら、研鑽の末になった日本文学研究の全体像が丁寧に跡づけられている。「謝六逸因为喜爱日本文学而去探索它产生的历史源流及其走。」(141頁)と、謝六逸の資質もあって日本文学の研究は史的なものになったとしている。

謝六逸の日本文学研究史上の価値と評価について踏みこんで検討をした論文として、王勇《民国时期的日本文学—谢六逸〈日本文学史评述〉》，载《中日关系史考》中央编译出版社，1995年1月と張嘉彦《谢六逸与日本文学》，《中国现代文学研究丛刊》1988年01期とが挙げられる。王氏は、参考書目に約250種の日本語の文献を挙げるなど、日本人の研究をよく渉獵しているが単に盲従するのではなく、謝六逸が「独辟蹊径」、つまり独自の評価と判断を下していること、また中国人の読者に配慮した題材の選択を行っていることを評価している。張氏は、謝六逸の好みは古代の文学にあったが、中国の新しい文学を支持推進するためにも積極的に日本の現代文学を紹介したと説き、文学流派の評価は「叛逆性、新奇性、大胆性、先锋性」に基準を置いていたと指摘している。また、謝六逸を初めとして谷崎潤一郎や佐藤春夫ら日本の唯美派文学の翻訳紹介が、日中間に「王尔德(ワイルド)熱」を起し、中国へ唯美主義文学を伝えることになったとする王向远氏の説も援用している⁸⁾。

三種の著作の内、最も出版の早い開明書店版『日本文学』(以下、開明版と略記)は体例から見ると、後の二書より文学史としての体裁は整っていないが、他にはない特色がある。万葉仮名や仮

名の発達、ヲコト点の説明が詳しく、片仮名の字源を挙げた後、「四十七個假名的蛻變，日本學者的意見各有不同，蓋從安藤正次，橋本進吉，大矢透諸氏。」(14頁)と注を付すなど、参考資料にあまり手を加えずに載せている感がある。万葉仮名の使い分けから古代日本語の音韻体系を解明した橋本進吉や古訓点資料から仮名の字体や用法の変遷を研究した大矢透など、大正時代に大きく進展した日本語研究を謝六逸が吸収していたことが分かる。どのように参考資料を利用したかが分かるとともに、他の二書と訳文の違うところもあり、翻訳の姿勢の違いを比較することもできる。例を挙げる。

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つはもとの身にして(在原業平・古今集)

月非昔日的月，春非昔日的春，唯有我身是昔日的我！(開明版、108頁)

月呀，你不是從前的月，

春呀，你不是從前的春，

只有我呀，

還是從前的我。(北新版、上111頁)

古池や蛙飛こむ水のおと

靜寂的古池呀，青蛙躍進，水的音。(開明版、180頁)

靜寂的池塘，

青蛙驀然躍進去，

水音聲音呀！(北新版、下17頁)

幽寂的古池呀，青蛙驀然躍入，水的音！(商務版、94頁)

行替えの効果を考え、また語句を選び表現を整えて訳している北新版に比べ、開明版の方は平易平明を重視していることが分かる。

北新書局版『日本文学史』(以下、北新版と略記)では、「俳句每首は十七字，即五七五調，譯成他國文是很困難的；現在勉强用五七五調去譯它。」と俳句の翻訳の困難さを説き、続いて「如這一首俳句，疏忽的看過，是不知它的好處的。如果我們想像某地有一所古寺，寺裏有葱蘢的樹木，那裏有一口池塘，一個人站在池邊，四周靜寂，連

風聲也沒有，這時忽然有一匹青蛙「工東」的躍進那池裏，水面發出的響是如何的使人心醉呢。芭蕉的這一首俳句完全把「閑寂」之味徹底的象徵出來了。後來的人對於他的這首俳句，有若干的解釋，有的說他道破了禪宗的奧底；有的說他暗示了宇宙的玄妙；有的說觸了老莊哲學的一端，其實不過是象徵「閑寂之味」罷了。」（北新版下17～18頁）と、よく注意しないとこの句の良さは分らないと読者に注意を促し、次に句の背景となっている古寺の鬱蒼とした木々の中にある池の傍らに人がたたずんでいて、風音も全くない辺りの静寂を破って蛙が突然飛び込み水面に起きた音に、その人は心を奪われている情景を思い浮かべるようにと丁寧に説明している。そして禅や老莊思想からの解釈などいくつかの異なった解釈があるが「閑寂味」がこの句の持ち味だと結論づけている。

開明版と北新版には、狂言『鎌腹』（訳名《自殺》）と『鬼の継子』が翻訳されている（後者で、若干の訂正をしている）。散文の長文の翻訳は、他に『枕草子』『春は曙』段だけなので、謝六逸が狂言に相当の興味を感じていたことが分かる。『鎌腹』は、妻にうるさく言い立てられた男が鎌で腹を切ろうとするが、死にきれず最後には妻と和解するという話である。『鬼の継子』は、鬼から妻になれとおどされた女が身ごしらえする間、連れていた赤子を鬼はあやしているうちに食べたくなったので女が抱いて逃げるといいう話である。狂言への謝六逸の評価については、「「狂言」的登場人物，都是表演懶惰者，悍妻，無識的武士，墮落的僧侶，遊方和尚等；它的表現方法也是民衆的，是用無論誰人都能够懂得的白話寫成，借以描寫矛盾，錯誤，不合理的可笑與言語遊戲，頗有催促看客的純真的哄堂一笑的力量。」（北新版、上149頁）、と評価している。狂言の登場人物は、怠け者、恐妻、無学の武士、墮落僧であり、その表現も人物同様に民衆的で誰もが分かる口語で書かれていて、矛盾や間違い、また一見不合理なおかしさと言葉遊び的な表現によって観客の笑いを促す力を持っていると説明している。狂言の中国語訳については、1926年9月に北京北新書局から刊行された周作人訳『狂言十番』（『骨皮』『伯母酒』『節分』（訳名《立春》）『成上り者』（訳名《發

跡》）『花子』（訳名《花姑娘》）『子盗人』（訳名《偷孩賊》）『柿山伏』（訳名《柿頭陀》）『針立雷』（訳名《雷公》）『井嚙^{どぶかつちり}』（訳名《工東嚙》）『金剛』）があり、ほぼ同時期の翻訳紹介ということになる。『骨皮』の「附記」に「狂言は高尚の平民文學之一種，用了當時的口語，描写社會的乖繆與愚鈍，但其滑稽趣味很是純樸而且淡白，所以沒有那些俗惡的回味。」⁹⁾と記すように、馬鹿げたことや愚かしさを描きながらも低俗にならない滑稽味が狂言の持ち味だと周作人は指摘している。狂言への深い理解と関心に基づいた二人の訳業は、日本文学研究が始まったばかりの時期の貴重な成果といえる。

1929年刊の開明版は、前々年刊行の初版を増補したものだが、増補されている「附録」は「一九二八年的日本文學界」と題した25頁あまりの1928年当時の日本の文学界の状況を伝える文章である。「一九二八年，在最近日本文學的歷史上，是可以注目的的一年。」（228頁）と書き始め、まず前年からの円本ブーム（1926年12月から始まった一冊一円の改造社版「現代日本文学全集」（全六十三巻）の刊行をきっかけに同類の全集が各社から次々と刊行された）により出版資本が作家や著作者を支配するようになったこと、そして出版の好況は、「純文学」でなく「大衆文学」を隆盛に向かわせたことを純文学雑誌の退潮と「現代大衆文学全集」の刊行の成功などから説明する。そして、従来の文学の閉鎖的で題材が狭小であったことが読者を大衆文学に向かわせたと指摘している。続いて、従来の文学の諸流派に代わってプロレタリア文学が台頭し、その影響下に新しい批評家達が出現したことを論じ、中野重治や藤原惟人ら新人の登場を伝える。プロレタリア文学の進展とともに、ルナチャルスキー（魯那卡爾斯基）・プレハーノフ（普勒哈落夫）・コーガン（柯幹）など、マルクス主義芸術論や文学論も盛んに翻訳されていることも紹介している（例えば、白揚社から「マルクス主義文芸理論叢書」が刊行されている）。

前年の昭和2年の芥川龍之介の死に象徴されるように¹¹⁾、一つの時代が終わり、文学界に新しい時代が到来したことを実感させる内容の文章に

なっている。謝六逸自身も「後記」に、「一九二八年の日本文学界一文，雖是片段的記載，但也是以推測昭和時代文学傾向，因此把它附在篇末。」と記している。日本の文学界の新しい変化を中国に最も早く伝えた文章であろう。文学現象の大きな変化を文学界の一年の動向から物語らせた犀利な分析といえる。

文章の後半では、「從鬼島來的人(中村吉藏作，澤田正二郎一座演。)」のように、戯曲名と作者名、そして上演的一座また劇場名が掲載されていて、貴重な資料である。演劇界のこの一年の動向として、小山内薫の率いる築地小劇場の活動が特

記されている。最後に今年一年の演劇界の三大トピックとして、二代目市川左團次のソ連訪問(左團次遊新俄)、十五代市村羽左右衛門の欧米旅行からの帰国(羽左右衛門回國)、坪内博士記念演劇博物館の完成を挙げて結びとしている。演劇界の動向にも十分注意を払っているが、近代演劇史の上でも重要なのが大正時代である¹²⁾。

開明版よりも日本文学史としてより整っているのは、北新書局版『日本文学史』と商務印書館初版『日本文学』(以下、商務版と略記)である。まず、両書の目次を対比させて、全体的な構成を比較するため、以下に目次を挙げる。

日本文学史		日本文学	
第一章 緒論	(一) 日本民族 (二) 文学的變遷 (三) 文学史的區劃	第一章 日本民族性	第一節 外國人對於日本民族性批判 第二節 芳賀矢一對於日本民族性批判 第三節 五十嵐力對於日本民族性批判
第二章 上古文学 總論	(一) 古代的歌謠 (二) 祝詞 (三) 萬葉集 (四) 古事記與日本書紀 (五) 宣命 (六) 風土記與氏文	第二章 上古文学	第一節 總論 第二節 歌謠與祝詞 第三節 古事記與日本書紀 第四節 萬葉集 第五節 宣命風土記氏文
第三章 中古文学 總論	(一) 小説(物語) (二) 詩歌 (三) 隨筆 (四) 日記文学 (五) 歴史文学	第三章 中古文学	第一節 總論 第二節 古今集及其他家集 第三節 源氏物語 第四節 竹取物語其他物語 第五節 日記與隨筆
第四章 近古文学 總論	(一) 詩歌 (二) 戰記物語 (三) 隨筆與日記	第四章 近古文学	第一節 鎌倉文学 第二節 室町文学
第五章 近代文学 總論	(一) 井原西鶴與浮世草子 (二) 江戸趣味の小説家 (三) 松尾芭蕉與俳句 (四) 近松與淨瑠璃 (五) 歌舞伎	第五章 近世文学	第一節 總論 第二節 小説 第三節 戯曲 第四節 俳諧 第五節 歌謠
第六章 現代文学(上) 總論	(一) 混沌時代	第六章 現代文学	第一節 總論 第二節 混沌時代

- (二) 新文學發生時代
- (三) 浪漫主義時代
- (四) 自然主義時代

第七章 現代文學(下) 總論

- (一) 新理想主義
- (二) 自然主義的旁系
- (三) 新思潮派的作家
- (四) 普羅列塔利亞文學

目次から分かることは、北新版の方がジャンルをより意識して全体をまとめようとしていることと、明治・大正文学の記述がより詳細になっていることである。北新版では、さらに「最近日本の文藝團體——一九二九年調査——」の附録が付されていて、同時代文学の動向を伝えるものとなっている。

北新版の附録では、文学者の職業的自覚からそれぞれの「思想上或主義、主張」に基づいて団結するようになったこと、そのなかでも最も顕著なのがプロレタリア文学であることをまず記している(下107頁)。「文芸団体」としては、(一)「文藝家協會」、(二)「普羅列塔利亞藝術團體」(三)「詩人協會」、(三)^{原書のママ}「評論隨筆家協會」、(四)「其他文藝團體」(a)「日本歌人協會」(b)「國際文化研究所」(c)「不同調社」を挙げ、各団体の歴史、現在の会員、主なる事業、協会規定を詳細に記述している。例えば、「文藝家協會」でいえば、211名の会員の氏名を全員列挙している。

この資料のもとになっているのは、巻末の「参考書目」中には挙げられていないが、日本文藝家協會編『文藝年鑑—昭和四年版—』新潮社、1929(昭和4)年1月であろう。同書には、昭和2年11月から昭和3年10月までの調査を基にした「文藝團體」の章があり、両者を比べてみれば、前書きも含め各項目を忠実に翻訳していることが分かる。例えば、原資料に「文藝家協會は大正十五年一月七日に小説家協會と劇作家協會とが合併して設立したものである。小説家協會は大正十年七月十六日、劇作家協會は同九年五月八日の成立にかゝるものであるが、共に會員の親睦共済を計り併せてその福利増進を目的としたも

- 第三節 新文學發生時代
- 第四節 浪漫主義時代
- 第五節 自然主義時代
- 第六節 各派分立時代

のである。従つて両者が合併して文藝家協會となつてもその目的に變わりはない。」(343頁)とあるのに対して、『日本文學史』では「文藝家協會，合併小説家協會與劇作家協會，於大正十五年(一九二六年)一月七日成立。小説家協會成立於大正十年(一九二一年)七月十六日；劇作家協會成立於大正九年(一九二〇年)五月八日，爲互謀親睦同濟起見，合併爲一，以增進福利爲目的，合併後成爲文藝家協會，其目的仍未變更。」(下108頁)となっているようにである。

文芸家協會は、大正11年の関東大震災をきっかけにして文学者、特に小説家の間に共済意識が生まれ、劇作家協會と小説家協會が合併してできたものだが、単に福利厚生 of 団体が誕生したということだけでなく、この協會の成立によって文学者の社会的地位が改善されていくことになるので¹³⁾、協會の結成は文学史の上からも重要である。文芸団体の動向から文学史を展望しようとした謝六逸の着眼点は評価されていいだろう。

細かく見ると、会誌『不同調』が1929(昭和4)年に入り終刊したことを附記しているように¹⁴⁾、謝六逸が最新の動静にも注意を払っていたことが分かる。それとともに注目されるのは、『文藝年鑑』では四番目の団体として扱っているプロレタリア文学の諸団体が、『日本文學史』では二番目に挙げられていることである。「附録」では、諸団体の歴史、会員を客観的に記していて、プロレタリア文学の直接の評価はないが、本論中では「加以俄國革命的影響與日本大地震後民衆生活的不安，勞働階級從夢中醒覺，努力爲自己階級奮鬥。他們的運動雖沒有怎樣的成效，但對於社會各方面的影響却很大。」(下103頁)と、労働者階級

の自らの階級への自覚と闘いという社会的背景から説明を始め、プロレタリア文学の章を結ぶのに当って、「日本的「普羅」文學到了昭和時代(1926—?)，已獲得了勝利，產出了不少的新作家，以前的舊作家也紛紛轉換方面，傾向於「普羅」文學運動。」(下105頁)と記していることと照らし合わせてみると、謝六逸のプロレタリア文学への高い評価は自ずと理解できる。

商務版にも、北新版とは違う記述が見られるが、興味深いものを以下挙げてみよう。まず日本人の民族性への指摘である。第一章「日本民族性」の章では、芳賀矢一『國民性十論』と五十嵐力『新國文學史』の説くところを要約した後、「未受外來影響的日本文學，天真樸素，沒有有一點虛飾，或誇張之風，這乃是民族性使然的。在日本的古代文學裏面，沒有希臘的長篇敘事詩，沒有如中國的莊子、列子寓言。所有的只是許多淳樸可愛的珠玉而已。」(商務版、八頁)と、日本の古代文学は、叙事性や修辭性には乏しいが、「淳樸」な日本人の民族性が生みだし愛すべき珠玉のような作品だと評価している。「祈年祭」の祝詞中に見出した「進取向上的精神」(13頁)と合わせて、「虚飾，或誇張之風」のない「天真樸素」さが、謝六逸自身の日本人の民族性への評価である。これと関わってくるのが、謝六逸の重視していた狂言への評価である。

狂言は「純白話(=口語)」で書かれているので。「一般平民所喜悅」するところであり、「平民文學的濫觴」であるとともに、「一種足以表現日本民族的樂天性快活性的文學。」(商務版、七七頁)なのだとする。日本文学の基底に流れるものとして、日本人の樂天的で快活、また天真で素樸な民族性を好意的に謝六逸が理解していたことが分かる。

謝六逸が『万葉集』に深い関心を持っていたことは、開明版、北新版ともに頁を割いて、柿本人麻呂(長歌も含む)、山部赤人、山上憶良(貧窮問答歌)の翻訳を挙げていることから分かるが、この商務版では「自然樸質雄健，天真是萬葉集中歌句的特色。更以抒寫情愛的歌極委婉可愛，不下於我國詩經裏的佳句。有許多樸野無華的民間歌謠(如東歌，見第十四卷，)都借此集以流傳，實

是一部最可寶貴的典籍；也是古代社會的一部有生命的寫真帖。」(商務版、25~26頁)と、「樸野無華的民間歌謠」に注目している。東歌(3399・3459)と、防人歌(4325・4328)の4首が翻訳されているが、どのような歌を扱っているのか防人歌二首を挙げてみよう。

父母も花にもがもや草枕旅は行くとも捧^{ささ}ごて
行かむ

我思念着的父母，能像花一樣就好了；如果是花，我在征途，也捧在手裏。

大君の命畏み磯に触り海原渡る父母を置きて
奉了君名，將我思念着的父母，留在家裏，我
腳撞磯石，渡過茫茫的海。

卷二十の防人歌全93首から選んだ2首であるが、謝六逸は「這兩首寫上古的兵役與夫役的苦惱、與公私感情的衝突」と評している。原歌の素樸だが純粹な心情を謝六逸は素直を訳出している。

「中古文學」の章で、「精彩」のある「男女戀愛的佳話」として『大和物語』第百四十七段の冒頭部分を翻訳しているが、本段に描かれているのは、田辺福麻呂(1085~1807)や高橋虫麻呂(1813~1815)が詠んだ生田川説話といわれている妻争いの伝承である。民衆の生活を描いた文学への共感狂言への関心とも通じるものがある。

謝六逸が、日本の古典文学の中でも高く評価していたのは、『源氏物語』だが¹⁵⁾、商務版では他の二書にはないふみ込んだ分析がされている。例を挙げると、『源氏物語』の内容上の特徴として挙げている四項のうちの一つである。

原作是靈肉爭鬭的藝術，是一部對於靈肉二者的爭鬭無法解決的苦悶史，這苦悶是女性的苦悶，苦悶於縱靈呢還是從肉的糾葛。書中又有欲愛而不得愛的女性很多…著者的修養高尚；有生存於信仰的精神；著者的悲哀是深深地潛伏着的，她的同情心是很豐富的。所以源氏物語的戀愛描寫，既不是十分的精神化；也不是十分的肉慾化，除了人情小說而外，又是一部傑出的戀愛小說。」(商務版、36頁)

『源氏物語』の恋愛描写の根底にあるのは霊肉の葛藤から生まれる苦悶だとし、作者の悲哀感と登場人物への同情心が霊肉の境界の境地を描いた傑出した恋愛小説にしていると評価している。

従来、1929年刊の『日本文学史』だけが中国における早期の日本文学研究として注目されてきたが、これまでの論述からも分かるように、他の二種の著作もそれぞれ他にはない記述内容と分析の視点があり、相互に補完し合う内容を持っている。これら三種の著作を総合して初めて謝六逸の日本文学研究の全体像とその奥行きを明らかにすることができるのである。

注

- 1) 《新文学史料》1993年第2期に発表された《谢六逸传》が基になっている。
- 2) 「我曾亲见他撰写《日本文学史》，桌子上所放的日文本大大小小的日本文学史（当称作本国文学史）几这三四十种，桌上、茶桌上，几乎堆满了这些书，可见参考之丰富。」赵景深《谢六逸先生》（原载《文坛忆旧》1948年4月版）
- 3) 翌八月に、謝六逸は同じABC叢書の一冊として、《農民文學ABC》も出版している。
- 4) 賀学君、蔡大成、櫻井龍彦《中日学者中国神话研究论著目录总汇》（中国社会科学出版社，2012年9月）の《总论》《一、神话基本理论》の項目の一番最初に《神话学ABC》が記載されている。
- 5) 「猫の墓」「火鉢」とともに「永日小品」中の一編で、『四篇』春陽堂、1910年5月に収める。
- 6) 「女体」「尾生の信」「英雄の器」「黄梁夢」の四篇は、『影燈籠』春陽堂、1920年1月に収める。
- 7) 「雪の日」は、『荒絹』春陽堂、1920年2月に収める。
- 8) 王向遠氏の説は、現在《二十世纪中国日本翻译文学史》北京师范大学出版社，2001年3月にまとめられている。近年の研究には大東和重氏の『郁達夫と大正文学〈自己表現〉から〈自己実現〉の時代へ』東京大学出版会、2010年1月がある。
- 9) 周作人『狂言十番』北新書局，1926年9月，21頁。「序」には、『北京週報』の記者だった亡友丸山幸一郎（昏迷）との交流からこの書物が生まれたことを記している。
- 10) 「大衆文學昌盛的原因，就是因爲它有普遍性，向來的文學是閉鎖在狹小的殼裏的，取材的範圍甚狹窄，大衆文學之受讀者歡迎，乃是必然的。」232頁
- 11) 「私與芥川氏不僅一面之緣，他的瘦削蒼白而有威棱的面容，細長入鬢的眉；滿頭的濃髮，一口清脆的東京白，使私永遠不能忘懷。」（謝六逸「隼語集」前言）『小説月報』第18卷第9期、1927年9月、この第9期は、紙面の大半を芥川の紀念号に当てている）と、芥川の忘れがたい印象を書いている謝六逸は、芥川の自殺に強い関心を持っていた。
- 12) 大正13年に『演劇新潮』が創刊され、大正13年には岡本綺堂、菊池寛らの『現代戯曲全集』全二十巻、昭和2年には小山内薫らの『世界戯曲全集』全四十巻の刊行が始まる。大正から昭和にかけての文壇状況については、鈴木貞美編『編年体 大正文学第十五卷 大正十五年』ゆまに書房、2003年5月を参照。
- 13) 鈴木貞美『入門 日本近現代文芸史』平凡社新書、2013年11月、243～244頁
- 14) 中村武羅夫が主催した文学雑誌『不同調』は、大正14年7月に創刊され、昭和3年（1928）12月に終刊になった。
- 15) 『源氏物語』を紹介した最も早い謝六逸の文章は、「源氏物語」『趣味』半月刊第2期、1926年9月である。